



かばんのまちをテーマに県知事賞
趣味が高じた絵本作家
加藤暁子さん(59歳)出石町安良



県立こどもの館(姫路市)主催の「手づくり絵本コンクール」の18歳以上の部門で、117点の中から、最も優秀な県知事賞を受賞したのが加藤暁子さんです。放課後児童クラブの支援員を務めながら、これまで約40冊の絵本を作成した加藤さん。当コンクールでは、これまでに優秀賞と奨励賞を計7回受賞しています。今回「やっとな願がかなった」と最優秀賞の受賞を喜びます。受賞作品の「かばんのまちとよおかへ」は、主人公のネズミが、壊れたかばんを直す

ため、電車に乗って豊岡にやってくる「ねずみのかばん修理工房」を訪ねる話。絵本は、豊岡駅前からカバンストリートまでの街並みをインクと色鉛筆で正確に描写し、そして、そこを歩く、小さくかわいく描かれたネズミは読む人を癒します。都会に住む本市出身の人から「豊岡が懐かしい」と言われることもあるそうです。「描きたいことはたくさんあるけど、なかなかできない」という加藤さん。今後は、仕事から学校での出来事なども描きたいと夢はいっぱいです。

Toyooka Topics —とよおかの“旬”な人と話題—



▲多くの観客が見つめる熱演

劇団「演劇FACTORY」公演
市民の力で「舞台を創る」

3月17・18日、但東市民センターで、劇団「演劇FACTORY」公演『土の詩～夢の果てに～』（企画制作：NPO法人プラットフォーム）が上演されました。旧高橋村(但東地域)「満蒙開拓団」の史実を背景に現代社会を交差させ、時代に翻弄されながら生き抜く人々の姿を描いた劇団オリジナル作品です。但東公演では、劇団員や地域住民など約30人が出演。当時12歳の少年が書いた満州からの手紙を、本人が特別出演して朗読しました。2日間で、約330人が観劇し、生の舞台ならではの「視覚」「聴覚」に訴える演技を体感。昭和初期の少女たち、開拓団、近未来の若者たちの「夢」の果てを見届けました。

城崎交通少年団引き継ぎ式・結団式
受け継がれていく伝統

3月16日、城崎小学校体育館で、同校の約150人の児童らが見守る中、城崎交通少年団の引き継ぎ式と結団式がありました。40年以上の伝統を誇る同少年団。団員は同校6年の全児童で構成され、毎朝の分団(集団)登校のリーダー役、あいさつ運動、防犯パレードなどに取り組んでいます。この日は、6年生から5年生に団旗や班旗、団員の証となるベレー帽とスカーフが引き継がれました。旧団長で6年の岩本峻侑君が「5年生が手本となり、交通事故のない城崎にしてほしい」とエールを送ると、新団長で5年の岩本唯愛さんは「さらに良い伝統を残したい」と応えていました。



▲団旗などを受け継ぐ新団員ら